東京都江戸東京博物館紀要　第11号　2021年３月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum, No. 11, pp. 1－24, March, 2021

江戸の改変 ―文禄・慶長前半期の様相―

齋藤慎一*

目次

はじめに
一 『落穂集追加』が描く江戸
二 天正末・文禄期の築城
三 「日比谷入江」と江戸城下
おわりに

キーワード 江戸城　馬出　本丸　新城　日比谷入江　慶長江戸図　落穂集追加

はじめに

慶長期以前の江戸城とその城下はいかなる構造であったか。このことは江戸の研究をめぐる大きな課題である[1]。この解明に向けて、二つの論考を通じて、検討を重ねてきた（齋藤二〇一九・二〇二〇）。論じたことは多岐にわたるが、本論と関わるところで、次の論点を掲げ、確認しておきたい。

○「江戸始図」に連なる一連の「慶長江戸図」は、本丸南側登城路すなわち江戸時代の登城路が確定していく変遷を示すもので、主に慶長十年代（一六〇五～一六一五）の様相を示す図である。

○太田道灌期に登場する「高橋」は平川門橋（厳密には同付近）に比定され、城下平河（おそらくは下平河）はその外側に存在した。

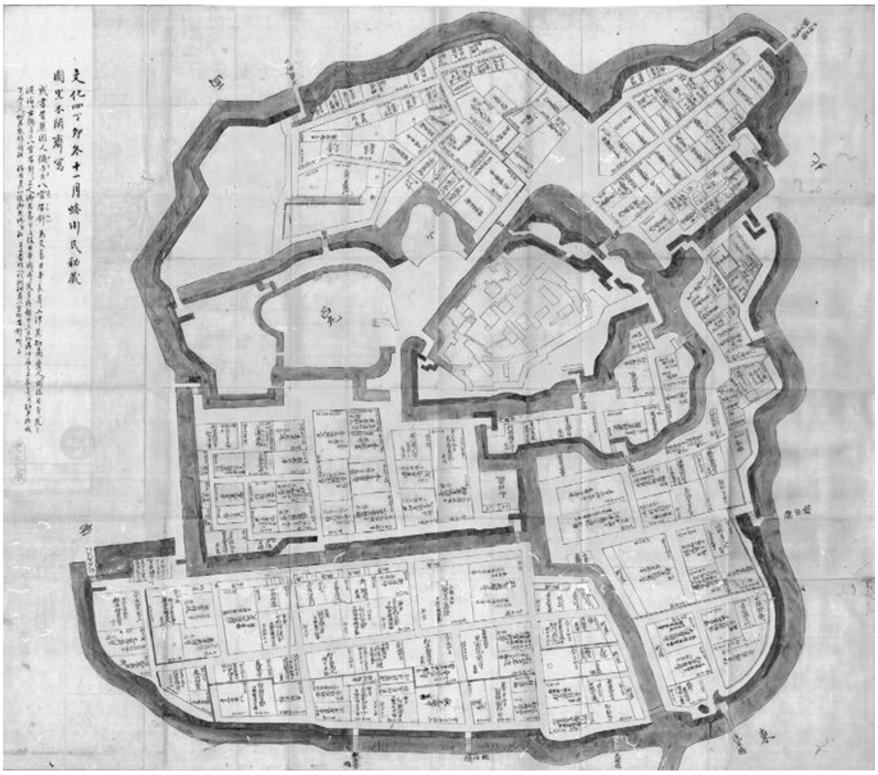
○近世初頭にまで史料に見られる「大橋」は、その名称が対象とする具体的な橋は時代により変わるものの、永禄期から慶長期に限っては大手門橋が該当し、永禄十一年（一五六八）に見られる「大橋宿」はおそらくは橋の東側に存在した。

このように慶長年間前半までの変化を検討してきたが、仮に画期を慶長十年としたとしても、家康入封から十五年の時間を経過に要したことになる。この時間を経て「慶長江戸図」に描かれた城の中核と城下の武家地という江戸の中核部という構造に至る。しかしこの時点ではすでに「大橋宿」も日比谷入江も存在していない。また地図外ではあるが本町通沿いの初期城下（玉井　一九八六）も成立していたと推測される。江戸城と城下は家康入城による一大変革を経過していたことになる。本論はその変化の内容を探るため、文禄・慶長期の江戸の都市構造の改変を再検討することを課題とする。

この際に、近世初頭の江戸について研究をリードした鈴木理生の見解との相違点をまず確認しておきたい。鈴木は近世江戸の成立を考えるなかで、江戸前島の重要性を説いた（鈴木　二〇〇〇）。

もちろん機械的に円覚寺と徳川幕府との領有期間を比較しても始まらない。また中世の江戸の範囲と、家康の江戸入り後、将軍の代にして四代、実年数で七〇年かかって建設された江戸の範囲と性格は、全く別物

*東京都江戸東京博物館学芸員



【図１】「慶長江戸絵図」
東北大学図書館所蔵（3-8827-1）

であることはいうまでもない。

鈴木は江戸の範囲と性格は中世と近世とでは異なると明言する。この点には大いに賛意を持つ。鈴木はその上で「家康の江戸経営の第一歩は円覚寺領江戸前島の〝横領〟で始められた」と論じている。鎌倉時代以来の江戸前島すなわち江戸湊の重要性を確認し、その江戸前島を近世江戸城下に取り込んでいくことの重要性を、比喩的にではあるが〝横領〟と論じた。都市江戸の外港としての江戸前島・江戸湊を重視し、江戸城の一体的な経済的な空間としての江戸前島を論じる。中世江戸を近世江戸に匹敵するような広い空間で理解しようとする論旨が、そこには見え隠れしている。ゆえに範囲だけではなく、性格の相違という論点が掲げられている。

そもそも江戸前島は「江戸郷前島村」として登場する、公領の村である。北側には芝崎村が隣接し、半島全体を意味するような江戸前島という広域地名で考えることはなじまない。前島は初出において得宗領化し、以後は円覚寺領として相伝されることが確認されるのみで、港湾的な機能の存在も確認できない。そもそも中世史料に江戸湊は登場しない。現時点で江戸湊を前島村に引き付けて理解することはできない。

近世江戸の町を前提としたために、いわば中世江戸の大都市幻想とでも言えるような江戸像を、鈴木はそして私たちは持っていたのではなかろうか[2]。そもそも家康入封以前は、「寒村」と表現することに誇張はあるにせよ、確かに規模の小さい城下であった。前掲の拙稿では平河と「大橋宿」という二つの町を問題にした。それぞれの町であるので、城下町は極めて小さかったことになる。したがって本論が描く文禄・慶長前期の江戸論は、寛永期の江戸に向けての過度期であり、右肩上がりに江戸が成長する過程という状況になる。鈴木が描く、前島を含む広域の江戸空間が性格的に転換するという見解とは異なるということを確認しておきたい。

一　『落穂集追加』が描く江戸

「慶長江戸図」の景観に至るまで、どのような経過をたどって、都市江戸は変遷したのであろうか。この問題は史料的制約が余りにも大きく、なかなか具体像を描き切れない。とかく日比谷入江の埋め立てと日本橋

架橋が象徴的な事柄として扱われ、近世江戸城下が語られている。

その困難な状況のなかで鈴木理生は当該の年代も含め、段階的な変遷を描き、以下のように述べた（鈴木 二〇〇〇）。

このような四代七〇年におよぶ江戸の都市的拡大の段階は、つぎのような時期にわけられる。

第一期…家康の江戸入りから幕府が開かれるまで
（天正十八・一五九〇～慶長八年・一六〇三）

第二期…幕府開設から豊臣家の滅亡まで
（慶長八年・一六〇三～元和元年・一六一五）

第三期…幕藩体制の確立期
（元和元年・一六一五～万治三年・一六六〇）

この三期にわかれる変遷に、「第一期は徳川家の自営工事であり、第二期の慶長八年以後はすべて天下普請というシステムによって施工された。」という説明も加えている。自営と天下普請の差に注目するのであれば、この時期区分も第三期目を立てるまでもなく、第一期と第二期―前半と第二期―後半とでも言いえるような時期区分である。これにより慶長八年をもって工事内容に大きな変化があったことがより明確に主張できよう[3]。

しかし、注意してみれば、この変遷は江戸入封・征夷大将軍任官（江戸幕府開府）・大坂合戦という政治的出来事を画期としている。もちろんこの事象は大きな出来事であり、江戸の都市構造が変更する画期となりうる。ただし、厳密にはこの両者は次元を異とするものであり、どれだけ関連しているかは、さらに検証すべき課題である。とりわけ本論が課題とする時期はおおよそ第一期として括られている。確かに第一期から第二期への推移は、本丸塁壁の石垣化の画期となり、大きな意味がある。しかし城や都市の構造に視点を据えた時、慶長八年が果たしてどれほどの画期となりえるかという疑念を持つ。ゆえにこの第一期の内容を今少し掘り下げてみる必要がある。結論の先取りではあるが、そこには日比谷入江の埋め立てや日本橋架橋のみならず、「大橋宿」の停廃および本町通沿いの初期城下の設定も含まれている。江戸城下の形成にかかわる重要な事項が、慶長八年以前という、幕府成立以前という時期に遡ることになる。この点だけをみれば、江戸の城下形成と江戸幕府成立とは次元を異とすると言えることに気づく。その意味で慶長八年という年次を意識して論じることが妥当であるかという問題を意識せざるを得ない。

このように論じながらも、解明する一次史料は極端にない。過去においても多くの叙述は『落穂集追加』[4]ほかの二次史料に拠っている。より正確を期すためには史料操作に厳密性を期すべきであろうが、一次史料の欠乏という状況により、『落穂集追加』に依拠してきた研究史を鑑み、まずは『落穂集追加』が描く内容を把握するところから江戸城とその城下を考えてみたい。

『落穂集追加』を扱うに際して、注目しておきたい点は、記載内容が聞き取り調査による書という性格を持つという点である。体裁として問答形式を取るが、発問に対する返答のなかで、「答ていわく、我等若年のせつ、さる老人の物語にて承りたる義有之候」（御当地御城始之事）、「其儀を我等及承り候は、」（御城内鎮守野之事）、「此義をは土井大炊頭殿家老共へ御申聞の由にて、大野知石物語を承りたる事にて候」（御城内古来家作之事）など、「さる老人」などと曖昧さを残すものの、可能な範囲において情報の出所を記すという姿勢を示している。そのなかでも小木曽太兵衛という人物は注目される。この小木曽からの情報は実に多く、人物の来歴も本文で紹介している[5]。少なくとも『落穂集追加』は全くの創作の産物ではなく、聞き取り調査の上での叙述となっている点は注目してよいだろう。

また『落穂集追加』は、事書で内容が示され、その内容の短い話題が

集められた、いわば説話集のような体裁になっている。その巻頭には江戸城および江戸に関する内容が意図的に配置されている。本論ではその記述に注目する。検討の対象とする内容を含む事書を、掲載順に記すと以下のようになる。

御当地御城始之事
御城内鎮守之事
西の御丸之事
御城内古来家作之事
江戸町方普請之事
弁慶堀之事
吹上御門外御石垣之事
団左衛門居屋敷之事

以上の事書から、『落穂集追加』の江戸と江戸城に関する記載は、中心部から外縁部へという、江戸の空間を意識した配列になっていることが確認できる。

加えて、また外縁部へ向かうという叙述の対象となった空間の移動は、同時に時間的な推移も意識している。例えば本文のなかに、「天正十八年八月御入国被遊候節」（御城内鎮守之事）、「関東御入国の節」・「其後御新城出来、次に西の御丸下の御曲輪なども出来」（西の御丸之事）、「慶長五年関ヶ原御一戦御勝利以後」（弁慶堀之事）など、話題とする内容の年代が記される。この状況からも、時間が経過するに従って、外縁部に向かって開発が拡大する様子も読み取ることができる。その詳細は後述して検討するが、先の記述などから内容や時間を読み取ると、次のように段階を整理することができる。

（第１期）　太田道灌時代段階
（第２期）　遠山時代段階[6]
（第３期）　徳川入封段階
（第４期）　御新城普請段階
（第５期―前期）　関ヶ原合戦前後段階
（第５期―後期）　御新城西の丸化段階

（第５期）を前期と後期に割ったのは、スタートとなったのが関ヶ原合戦後という時間的画期をもって叙述していることが第一にある。一連の動きの最後までを同じ段階とするのがよいと考えるが、叙述の意図を汲み、スタートの画期性を意義付けるために、前期として取り出し、完成段階を後期と考えて（第５期）のなかで二分割してみた。

江戸城と城下の変遷過程を確認するため、それぞれの事書の話題のなかから、上記の整理される段階に、丸番号を振り、事書を意識しつつ、関連する記載を『落穂集追加』から抜き書きしてみたい。

（第１期）太田道灌時代段階

（御当地御城始之事）

①　鎌倉通用の為、江戸表に一城を取立へき所存を以、爰かしこと城地を見立て、初は元吉祥寺の台を城に取立可申と有之、

②　道灌聞て、国の名は武蔵、郡の名は豊島、今城に取立へきと思ふ三ケ村の名とてもを〳〵吉瑞の名なり、此地に城を築き候に於ては、末々繁盛疑なしとの考を以、城に取立候となり、

（御城内鎮守之事）

③　道灌は歌人ゆへ天神の社を建置たると仰にて、

江戸時代に太田道灌の時代の記述となるので、多分に伝説的な記載となっている。そのなかで平河天神社に関する記載を太田道灌が創建したとして書き留めている（③）。しかし『落穂集追加』の記載には平河の町場に関する記述はほとんどない。

また『落穂集追加』のなかでは、この天神社とセットで論じられる社として山王社がある。この変転の様は後述するが、この山王社に関する

起源は触れられていない。秩父平氏の一族である河越氏が自らの本拠地に山王社（現、埼玉県川越市大字上戸）を勧請したように、同族の江戸氏も自らの本拠地に勧請したと考えられている（前島康彦 一九七五）。しかし、『落穂集追加』にはこの山王社の所縁も含め、江戸氏に繋がる伝承は記載されていない。

（第２期）遠山時代段階

（御城内鎮守之事）

④　定て鎮守の社にても有之候や、是より北の方にあたりて候御曲輪内に、小さき社たち、両社相見へ候との義に付、即御覧可被遊由にて、式部殿（榊原康政）御案内にて被為入候所に、小坂の上に梅の木を数多植廻し、その内に宮立、両社有之候を御覧被遊候て、

⑤　子細は開基の道灌と申ても、其後遠山丹波（綱景）・同左衛門（直景カ）など申すものとも義、何れも上杉・北条家に於ては少身なる士大将ばかりの居城の事に候得へは、

⑥　左様の御普請の節、北の御丸の内に有之候山王の社をば、紅葉山へ引移し候様にと被仰付、宮なども軽々と新に御建立被遊、天神の社の義は何の御沙汰も無御座候に付、御普請の邪魔になり候よしにて、平川口御門外の御堀端へ持出し差置之由、右両社の跡、梅の木多く有之候を以て、今に梅林坂と申触候となり、

⑦　御入国の節までの義は、下町と申候ては一町も無之、平川御門の外に平川町と申て、是は夫より唯今の麹町の方へ取続き、甲州海道と申て有之候となり、

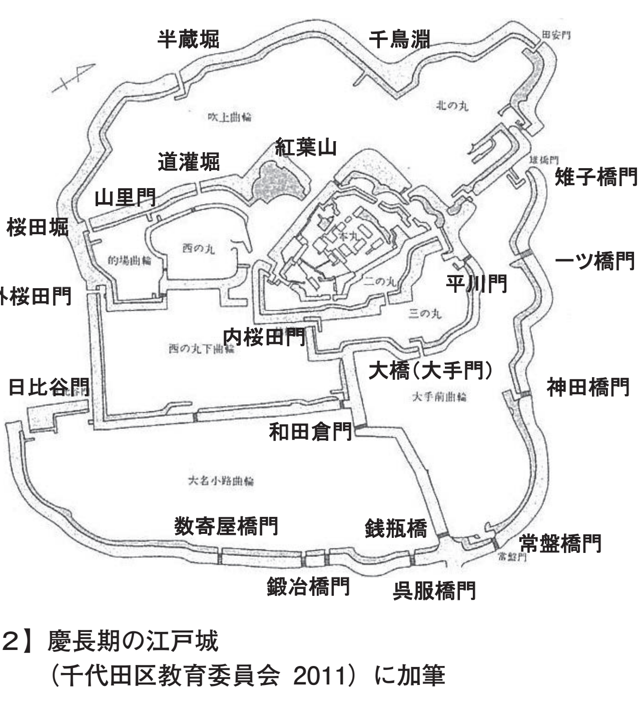
（西の御丸之事）

⑧　只今の西の御丸の所は野山にて、所々に田畑抔も有之、春は桃・桜・梅・躑躅などの花も咲き、於江戸中貴賤の遊山所にいたし、天地庵と申、常念仏堂なとも有之候也、

⑨　御入国の節も只今外桜田御門の立候所は、大きなる扉なしの木戸門立て有之、名を小田原御門と申候、唯今の八代洲河岸辺りには猟師共の家居有之、肴など買ひ求め候節は、右の猟師共方にて相調申たる事に候、

⑩　遠山時代の城と申には、石垣なと築候所とては一ケ所も無之、皆芝土居にて土手には竹木茂りあひ有之候由、

⑪　其時代には只今の内桜田・大手御門の辺より三の御丸平川口迄の間には、かきあげ土居の様なる惣構の形有之、土手には竹木生茂り、四五ケ所斗に海端に出入仕る軽き木戸門も有之、其内には遠山が家中の侍共の居屋敷の由にて、余程大きなる家も有之、尤



【図２】慶長期の江戸城
（千代田区教育委員会 2011）に加筆

少き家の義は余多有之、寺なとも二三ケ所有之、籠城の節、自焼をも不仕、其儘にて残り有之候に付、御入国節、殊の外御用に相立と也、

遠山時代という記載ではあるものの、徳川家康入城段階に見られたものが中心となっている。基本的には家康段階で継承されなかったという意識なのだろう。

（御城内鎮守之事）では江戸の概括的な景観が記されている。まずは当時の江戸城が大名レベルではない、小さな城であったことを指摘し⑤、城下には平川町があったと記載する⑦。本丸周辺には山王と先述の天神社があったことを記載する（③・④・⑥）。

（西の御丸之事）では、本丸から谷を挟んだ西ノ丸周辺が、築城以前は野山であり⑧、外桜田門の地は外郭の門という意識であったらしく、門扉のない「小田原御門」があったとする。そしてその周辺について「唯今の八代洲河岸辺り」は漁村であったと記す（⑨）。

詳細は後述するが、「八代洲」はオランダの貿易商人ヤン・ヨーステンに由来する「ヤヨス」を意図した地名表記と考えられ、現在の千代田区丸の内で日比谷の堀端とされている。さらに「河岸」と記載されることから、日比谷入江に面する河岸があったと考えるべきだろう。さらに注意すべきは「八代洲河岸辺り」の表記に「只今の」が冠されている点である。無論、『落穂集追加』が成立した年代には日比谷入江が存在するはずもなく、河岸も存在しない。「慶長江戸図」の頃であっても同様である。したがって、このあたりの記述は「只今の」の表記から慶長年間以前の史料がベースになっていると考えられる。丸の内が河岸であったとすれば、当然ながら西の丸下周辺の地は日比谷入江のままで、「慶長江戸図」以前のある段階に至るまでは、同所は埋め立て以前の状態であったということになる。ゆえに⑨の記載は日比谷入江が存在した頃の景観を窺い知ることができる貴重な記載である。

そして、遠山時代の江戸城は石垣がなく空堀で構成されていたという構造についても書き残す（⑩）。

（第3期）徳川入封段階

（御城内鎮守之事）

⑫　其節御城内には、先城主遠山左衛門か居宅、其儘にて相残り有之候え共、永々籠城の中に捨置候ゆへ、悪く破損におよひ、その上とりふきに仕たる屋根の上を、籠城之節、土にてぬり候につき、其もり雫にて畳・敷物等もくさり果申候を、悉く御修復被仰付、

⑬　惣して江戸御普請の始りと申は、御本丸御手始めの由に候、

⑭　関八州の御守護職をも被遊候権現様の御座城に罷成可申様は無御座候に付、御入国後万事を被差置て、御本丸の御普請に取懸り被遊候、古来の義は御本丸と二の丸との間に幅七間余りにも相見へ申から堀なと有之候をも御埋させ被遊候よし、

（西の御丸之事）

⑮　御入国の翌年あたりの事かと覚申候、長雨の以後、大南風の吹候義有之、其節高汐上り、件の猟師町へ水つき候ゆへ、猟師共船に妻子を乗せ、家財を取つみ、唯今馬場先御門内になり候あたりの畑中に有之候、大水共に船を繋き、食事などを調へ罷在を、御城へ御番に上り候砌、見かけ候よし、

⑯　御入国の刻、御本丸・二の丸・三の丸と申て有之、其間には余程の深きから堀なと有之候を、早速御埋させ御本丸の内、殊の外広がり、中仕切の御石垣なと出来候ては、以前の御城の面影も無之、

（御城内古来家作之事）

⑰　先城主遠山、御城内の家宅の儀は不及申、二・三の丸、外郭に有之候家など迄其儘にて残り有之を以、当分御城内に於て家屋に

御事の欠申儀とては無御座候と也、然れ共御城内の家にこけらふきと申ては一ヶ所も無之、悉く日光そぎ・甲州そぎなとを以とりふきに致し、御台所はかやふきにて手広くは有之候へ共、殊の外なる古家にて、御玄関の上り段に船板のはゝの広きを二段に重ね、板敷と申儀も無之、土間にて有之候に付、本多佐渡守（正純）殿、是は余り見苦敷儀に候、他国よりの御使者抔もなくては叶ひ不申候、責て御玄関廻りをは、御普請被仰付て可然と被言上候へは、其方はいられさるりつぱだて（立派立）を申と有之、御笑ひ被遊、御家作の義には、御構も無御座、御本丸と二の丸との間に有之堀を埋めたて候御普請を御急ぎ被遊候由、

（江戸町方普請之事）

⑱　只今の日本橋筋より道三川岸通りの竪堀の掘られ候か初りにて、夫より段々と竪堀・横堀共に出来、其揚け土をは堀端に山のことく積上有之候を、諸国より参り候町人共、願ひ出候へは、町屋を割被下候に付、勝手次第に右の揚け土を引取、地形を築立、屋敷取を仕り、

（団左衛門居屋敷之事）

⑲　只今日本橋尼店と申あたりの茨原の中に地高成所在之、段左衛門と申穢多頭の家居有之、二抱へ三抱へほとづつ共相見へ候ことく成大木なとも余多生茂り、一かまへの穢多村在之候を、御入国以後、只今の元鳥越と申辺へ引移り候様にと在之候処に、

徳川家康の江戸入城により、改築がスタートする。改築にあたっては本丸拡張が優先されたことがまず記載される（⑬・⑭・⑯・⑰）。その際に、北条時代の本丸と二の丸の間の堀を埋めたと記している。城内の山王社はこの時に紅葉山へ、天神社は平河門外の堀端に移転となった（⑥）。この時点では居住施設は北条時代のまま使用したとする（⑫・⑰）。この居住施設であるが、⑫に籠城の際に防火のために屋根に土を被せたという記載があり、興味深い記事を含んでいる。また拡張工事は城下にまで及んでいる（⑱）。後述する（第４期）に西の丸下の基盤整備がみられるので、この記述は（第３期）の大手前の郭を中心とした普請であろう。そして、当時の城下の端は、被差別部落の記載から日本橋付近であったことも推測できる（⑲）。また西の丸下に日比谷の集落の水害の話題も記載する。

（第４期）御新城普請段階

（西の御丸之事）

⑳　遥か後に権現様御隠居所にも可被避との仰にて、外かまへの御堀・御石垣等も出来、其内に御屋形も立揃ひ、其節は御新城と申となり、去に依て御本丸には取離れ、紅葉山の下通りを半蔵御門の方へ行ぬけに往還にて有之候に付、御新城の御取立以前は、紅葉山を諸人の慰所に仕候となり、

㉑　其後御新城出来、西の御丸下曲輪なとも出来、外桜田御門建候砌、此御門の義、向後は外桜田御門と可申由、小田原御門と申儀は停止の旨、頭中より急度被申渡候よし、

㉒　惣して西の丸下の義ハ、地高に有之候処に、西の御丸の御堀なとも掘られ候に付、大分の余り土有之候、猟師町近辺の蘆原の義は、大形築地の如くになり、猟師町の義も程なく一つゝきの町屋となり、肴店其外種々の売買物なども有之、所の名をはひゝや町と申、殊之外繁昌仕候処に、

入国後、本丸普請に引き続いて、西の丸付近が新城として築城された（⑳・㉑）。この新城は家康の隠居所として構想された。後述する記載より関ヶ原合戦後には隠居地が駿府に変更されたことから（後掲㉔）、江戸の隠居地新城は、一五九〇年代に構想され、完成していたことになる。また新城の中核部の普請が完了した後、西の丸下の郭も普請された

（㉑・㉒）。のちに日比谷町は移転を強いられている（後掲㉖）。また、地が高いと記しているのは、西の丸東側は直接に日比谷入江およびその湿地を含んでいなかったことを示している。後述する西の丸下内の和田倉遺跡の地点は日比谷入江の海であった。これらから、この段階では「慶長江戸図」に描かれた形状の西の丸下の郭でなかったと推測される。

この新城は、その語彙から谷を挟んだ本丸付近の江戸城とは別の城として構想された。そのために城下の町場も別個に考えられていたらしい（㉒）。新城普請で発生した残土が、「八代洲河岸辺り」にあった漁村の芦原を埋め立てるために使われ、土地が造成されて猟師町が拡大し、「一つ、きの町屋」となったとすることから、この時期に拡大し、ひとつの画期となったことがうかがえる。ゆえに「ひゝや町」（日比谷町）という名称が記載されている[7]。日比谷の語源について水江漣子は「ひびとは、「海中の魚を取る竹」を意味する篊であろう」（水江　一九九二）と指摘するが、同所が漁村であったとする記載とかかわる。後には武家地となり、町場は移転することとなるが、一五九〇年代に新城と関係をもって日比谷町が成立していた。

すなわち、豊臣期の江戸は、二つの城とそれぞれにかかわる町場という、家康—秀忠という二頭体制が企図された空間として設計されていた。

（第５期—前期）関ケ原合戦前後段階

（御城内鎮守之事）

㉓　右平川町の内に薬師堂有之て、其薬師別当天神の社を預り度と願ひ候て、薬師堂の片脇に移し置候処に、其近辺氏神に可仕社町屋の義も御用地になり、麹町辺へ引ケ候、則平川天満宮も引移候所に其近辺氏神に可仕社迚も無之に付、段々と繁昌いたし、今は平川町の天神と申て、余程の社頭となり、上野御門主の御支配となりて、古来よりの薬師堂は仮社内に有りと也、

（西の丸之事）

㉔　兼ては御新城を御隠居所にと有之思召に御座候処に、関ヶ原御勝利以後、天下御一統ゆへ駿府を御隠居所と被遊候に付、御新城の義も御曲輪門と罷成、紅葉山下と坂下の両所にしまりの御門出来して、御本丸と一構に被仰付候を以、山王の社へ参詣も成かね、貴賤ともに氏神詣迷惑仕候段、達上聞、半蔵御門外御堀端に山王権現の社、新に御建立被仰付、

（弁慶堀之事）

㉕　外桜田辺と只今の大名小路と申辺に於て、東西の外様大名衆へ望次第屋敷を被遣候と也、（中略）其節大名小路辺の義は、茨はらにて候へ共、御堀々よりの揚け土を引取候に付、地形をも早速出来候由、外桜田辺の義は、殊外地形に高下是あり、各土取場に難義被仕、夫迄の儀は御新城の外かまへの御堀幅漸く十間余も有之候を、屋敷拝領の諸大名方より願ひを以、只今の通り御堀幅も広かり、底も深く罷成候付、其揚け土を方々へ引取、地形に用ひられ候と也、

関ヶ原合戦後、家康の政治的立場は大きく変化し、それにともなって江戸の政治的な位置も変化することになる。新城に想定していた家康の御隠居所は駿府城へと変更になった（㉔）。これにともなって、新城は本丸を中心とした江戸城の一部となる。「御新城の義も御曲輪門と罷成」と記載され、やや意味が取りにくいが、後に西の丸の名称を持つ郭となり、本丸を中心とした構造の一環で門が構えられたということになろうか。「紅葉山下と坂下の両所に」と、両所の中間にある谷の両端を塞ぐ地点に門が構えられたことも記される（㉔）。一体化したために、紅葉山に営まれた山王社も移転となり、半蔵門外の堀端に移転とされている（㉔）。具体的な変化は次の（第５期—後期）の段階となるが、関ヶ原合戦後に二つの城が合体した構造へと、江戸城の構造は大きく変更される。

そして何よりも注目すべきは諸大名の屋敷地の問題である。関ヶ原合戦の勝利者の傘下へと、各大名が江戸屋敷を構える状況が加速する。『落穂集追加』は外桜田付近が大名屋敷の対象地であったことと、大名小路周辺が「茨はら」であったが、盛土によって地業したことを記載する㉕。この対象地には西の丸下（旧三の丸）の地も含まれていたと思われる。この地は日比谷入江の最奥であり、平川の河口にあたり、堀普請による残土による埋め立てによって西の丸下の郭となった。西の丸下の位置は本丸と西の丸の間の谷（局沢）の出口になり、この場所を塞ぐように郭を構えるのは城の一体化に相応しい。またこの郭を寛永年間頃までは三の丸と呼称したが、この名称も本丸と西の丸を連結させる郭としての役割が担わされていたことをうかがわせる。

また外桜田付近の造成は大規模だったようで、ここでの残土が城下町の造成の益となったとする。ただし『落穂集追加』はここで普請された堀は弁慶堀と記載するが、弁慶堀は赤坂門外の惣構えの堀なので、おそらくは三宅坂の桜田堀の状況を記載しているのであろう。桜田堀から半蔵堀・千鳥ヶ淵を越え、平川へと続く堀線は、西の丸を江戸城に取り込む一城化にともなうと考えられることも関連する[8]。

先の山王社移転とともに考えねばならないのが、天神社の立地である。戦国時代まではともに鎮座していた天神社は城普請の障害になるため、平川門外の堀端へと移転させられていた⑥。場所から平河の町場の一角であったのだろう。この天神社について「其近辺氏神に可仕社町屋の義も御用地になり、麹町辺へ引ケ候」と記載されている㉓。ここにある「御用地」とは、町場から武家地への転換を意味している。平河の町一帯が「御用地」となり、麹町辺へ移転となったという。天神社の移転は町場の平河町への移転と一体であったこと明らかとなる。あるいは（第三期）の堀割⑱と同時期と考えることも可能かもしれない。

しかし、山王社が紅葉山へ移転した同時期に天神社が平川門外の堀端に移転したのは明らかであるので⑥、平河町へ移転する時期はやや遅れると考えられ、移転に時期差を想定するのが妥当であろう。したがって、この『落穂集追加』の記事㉓、さらには引き続いて江戸城下の平河付近が武家地として整備されるのは、大手前の堀割が完成する段階、江戸城が一城化される関ヶ原合戦後の段階のいずれかと考えるべきであろう。とりあえずは（第3期）の当初ではないという点から、（第5期—前期）の位置に置いたが、後述する銭瓶橋の記事などから関ヶ原合戦よりやや遡る可能性がある。

この（第5期—前期）は関ヶ原合戦にともなって、江戸城の一体化が実施され、西の丸下と外桜田付近の大名屋敷地の地盤整備が行われる画期となった時期といえよう。

（第5期—後期）御新城西の丸化段階

（西の御丸之事）

㉖ 其以後、御曲輪門となり候節、只今のひゝや町へ引申候由、是又小木曽申候也、

㉗ 右寺々の義は間もなく、外の所へ御引かせ被成候節、御金子なとも被下置候と也、其後、右の場所は皆々御内曲輪に罷成、外大手・内桜田等の御門々等立候ても、其内にハ御老中方諸役人の屋敷など有之候は、大猷院様御代迄の義に有之候也、

（吹上御門外御石垣之事）

㉘ 秀忠公様御代、西の御丸・吹上御門外の土居を不残御石垣に被仰付へきとの儀にて、伊豆浦より石なとも大分廻り、御堀端迄運ひよせ候処に、右の御普請、俄に御止めに成候と有儀をは、いかゝに聞及候哉、

㉙ 其子細は将軍様当城に被居と有は、東夷を押への為の義なれは、是より奥の方へ向ひての要害と有は尤の儀也、帝都の方は味方地

の儀なるに其方へ向ひて要害と有るは、無益の儀なり、関ケ原の合戦という政治的契機により、江戸の大改造が始まったとする。その後は寛永期にまで連なる江戸城と江戸の拡大ということになろう。ところが、『落穂集追加』は寛永期以前の段階で節目を設けている。

まずは一城化の結末が「西の御丸之事」に記載される㉗。外大手（大手門）や内桜田門（桔梗門）が構えられたとの記載は、旧二の丸（新三の丸）の堀と塁壁が整備されたことを述べている[9]。その前提として寺社が存在していたものの「皆々御内曲輪に罷成」と記していることは、戦国時代以来の寺社が移転されたことを記している。すなわち旧二の丸（新三の丸）の整備が完成したという趣旨と考えられる。平川の西岸に存在したであろう戦国時代以来の町場は、この時点で完全に一掃されたことになる。

加えて、新城の西の丸化にともなって、城下の町が整理された様相も見られる㉖。新城の城下であった町場が日比谷入江の対岸にあった現在の日比谷町へ引っ越したと述べている。新城普請の段階で一続きの町となった日比谷町㉒は移転を強いられた。

そして注目したいのは西側の石垣化の記載である。『落穂集追加』の記載は多分に物語調の記載が続くが、桜田堀の塁壁の高い石垣化の計画立案とその中止の事実を発問として、まず取り上げる㉘。その回答は東北地方の大名には備える必要があるが、朝廷の存在する西に向けての普請は不要と掲げている㉙。多分に説話的な内容であるが、この計画中止をもって『落穂集追加』は城普請の記載が無くなる。すなわち江戸城は一定の完成をみたという表現と考えられる。江戸城や城下は寛永年間の惣構えまで普請が続くのは周知のことであるが、『落穂集追加』はその記載を含んでいない。編纂の過程で江戸城拡張が節目を迎えたという作者の意図が反映されていると考えるべきなのであろう。

『落穂集追加』は説話集のような体裁を取りながらも、江戸に関する記載が空間的広がり、および時間的変遷を踏まえて構成され、それらが冒頭部分に編集・配置されていた。ここに編纂の意図があるのは明確であろう。あるいはこの構成に至ったのは、前提となる著作物が存在したのではなかろうかということを考えさせる。すでに触れた点と重複するが、このことは内容からも指摘できる。『落穂集追加』の記載する江戸および江戸城の拡張の記事は、元和・寛永の工事の記述を含まず、二城が一城化した段階の、おおよそ慶長十年代で締めくくられていた。『落穂集追加』が享保十三年（一七二八）ごろの著作であり、著者大道寺有山は寛永十六年（一六三九）生まれであるという点を踏まえた時、なぜ元和・寛永の工事の記述を含まないのかという違和感を持たざるを得ない。にもかかわらず、江戸城の二城の一城化が完成した段階で普請のおおよそは終わっている。内容の統一が取れた点は何らかの著作物を前提とした可能性を推測させる。

記載した内容は対談という形式をとりながらも、聞き取り調査の内容の記述となっている。いわば江戸のオーラル・ヒストリーなのであるが、この聞き取り調査が直接的に可能であったかという状況も、『落穂集追加』の成立年代からは考えることを避けるわけにはいかない。そもそも大道寺有山の他の著作物には『落穂集追加』と記載内容に重複が見られる。おそらくはストックした情報をそのたびごとに取り出して編纂したことを示している。

これらから『落穂集追加』の江戸城と江戸城下の空間成立に関する叙述は、一貫した視点によって記された前提となる著作物があったと考えておきたい。おそらくそこに登場する関係人物は小木曽太兵衛なのかもしれない。ゆえに記載する内容に正確性が生まれたと考えておきたい。

他方、内容に全く疑問がないわけではない。例えば、平河の町場については、その存在を認めつつも、具体的な記載を欠く。加えて「大橋宿」の記載が一切ない。この点は大きな疑問である。また町場については、

この状況と反比例するように、日比谷の漁師町と日比谷町の発展が記され、外桜田門周辺の記載が動的である。筆者の情報源の影響であろうか。

以上のように、『落穂集追加』は家康段階の江戸城の変化に多くの視点を与えている。叙述によって描かれた空間は、おおよそ『慶長江戸図』に描かれた範囲に一致することも興味深い。

二　天正末・文禄期の築城

『落穂集追加』の記載に従い、徳川家康期までの江戸城と城下の様相を概観してきた。この変遷の様相を基軸としつつ、他の史料と対照し、『落穂集追加』の記載する内容の検証をしてみたい。

【史料1】某書状（『大日本古文書』浅野家文書五四）

　尚以其表晝夜共奉察候、切々以飛脚可申上之処、兎角罷過、
　無音迷惑仕候、従而会津へ御働座之御伴、貴殿様も御書立ニ
　御座候間、可被成其御心得候、以上、

態以飛脚令啓上候、然者其表御取纏之儀付而、晝夜御苦労共察候、頓而ハ以書状成共、可申上之処、兎角罷過致迷惑候、

一、来十五日ニ　上様会津へ可被成御働座之旨、御錠候、則一昨日二日ニ会津迄之通御つくらせ可有之由候て、御使番衆西川八右衛門、垣見弥五郎、杉原源兵衛、水原亀介、友松次右衛門、此五人被仰付被遣候事、

一、小田原御取纏之儀、弥丈夫被仰付、一町ニ付城一ッ、可仕之由、則先手之衆ニ城数五拾壱　被仰付候、此中之仕寄をも御はらひ候て、塀三重御懸候、此普請出来次第ニ、会津へ可被成　御越之由御錠候事、

一、小田原無事之儀、三松被取扱候て、被得　御錠候処ニ、三松ニ不似合儀被仰上候とて、以外被成御腹立、けんにう共ニ御自国を御はらひ被成候事、

一、家康をも江戸まで被召連、江戸之御普請可被仰付之由、御錠被成候事、

一、にら山相済候付而、一昨日二日ニ悉御人数共、小田原表へ［

（後欠）

小田原合戦が終結を迎えた頃の書状である。本文中に「一昨日二日」とあることから、発給日は天正十八年（一五九〇）七月四日にあたる。北条氏直は七月一日には投降を決意しており（小田原市史Ⅲ・二〇七六）、受け入れ側の豊臣家の調整を待って、五日に滝川一利陣に投じた（『家忠日記』同日条ほか）。本状はその前日の発給となる。三ヶ条目と六ヶ条目に小田原城と韮山城（静岡県伊豆の国市）の城攻めの状況が記載されるが、四ヶ条目に「小田原無事之事」として、終戦に向けての斯波義銀の仲介を激怒して認めなかった秀吉の対応が記載されている。書状の発給者が錯綜する戦場の情報を整理し、事態に対処している。発給者および受給者ともに不明であるが、政権の中枢部にかかわる人物の発給であること、および浅野家文書の一点であることから、浅野長吉が関係する可能性がある。

その書状の五ヶ条目に「徳川家康を江戸まで召し連れて、江戸の御普請を命じるという決定が出された」と記載される。ここでは、家康と江戸との七月四日時点での関わりについての豊臣政権の認識が示されている。そこでは、先ず江戸への赴任は「召連」であり、その語から転封によってではなく、従軍の命令によるものと考えられる。そしてその目的は江戸普請であったことが記載されるが、その普請も転封によるものではなく、「御普請可被仰付」の記載から、普請の主体者への敬意を表する「御」が付せられ、「可被仰付」と上位者からの命令である旨が示される。すなわち、江戸普請は豊臣政権の政策の一環であり、豊臣政権からの命令であったという関係になっている。

従来、家康の江戸入城についてはさまざまな議論があった。しかしこの史料に拠る限り、徳川領の存在を前提とし、転封にともなって徳川家による主体的な発意による江戸城の拡張が行われたのではなく、豊臣政権の城として、政権の政策的意図による築城であったことになる。同じ時期、上野国箕輪城（群馬県高崎市）も秀吉の命令によって、徳川家臣であった井伊直政に普請・在城が命じられている（彦根市史 近世一・6）。これらは、宇都宮および会津での仕置き（市村高男 二〇一三）によって関東・東北の体制を固めるに先立って、旧北条領国内城館の存続・廃城を決め、豊臣政権の考える地方の城館体制とでもいえる支配体制が構想された結果であったと考えられる。すなわち、小田原城や鎌倉ではなく、江戸城を旧北条領国（すなわち後の徳川領国）の中核に据えるという選択は、豊臣政権の支配体制構想によってなされ、徳川家康はその政策に位置づけられたことになる。

その後、家康は七月十六日に小田原を発し、同十八日に江戸へ到着する。以後、家康は新たな領国の経営に乗り出す（相田文三 二〇一一）。江戸城の普請も翌年には開始されたらしく、状況の一端は『家忠日記』にうかがえる。状況は表「『家忠日記』の江戸普請記事」に抜き出した。

『家忠日記』に見える江戸城の普請記事は以上の四年間にとどまる。松平家忠が参画した普請の概要を表から整理すると、以下のようになる。

《一回目》天正十九年（一五九一）四月、
・江戸城普請の初回であろう。 …『落穂集追加』（第3期）
《二回目》天正二〇（文禄元年）三月から五月、
・「御隠居御城堀」とあることから、新城の普請。 …『落穂集追加』（第4期）
・五月三日に「普請出来」とあるので目的の完成。
《三回目》同年七月から八月、
・八月廿二日に「江戸普請出来て」とあるので目的の完成。
《四回目》文禄二年正月から三月、
・三月三日に「普請漸出来候て」とあるので目的の完成か。
・三月廿一日に「普請出来候て」とあるので目的の完成。
《五回目》同年六月から七月、
・七月廿七日に「江戸普請出来候て」とあるので目的の完成。
《六回目》同年八月
・八月廿三日に「ふしんそんし候間、早々普請」とあるので、損壊の対応。

概要をこのように整理したところで、まず指摘できる点は、『落穂集追加』で分析した（第3期）と（第4期）の始期がそれぞれ《一回目》と《二回目》にあたると推測できることである。『家忠日記』の《三回目》以降の普請場所が明らかにならないが、（第5期）は関ヶ原合戦以降になるので、これらすべて（第3期）と（第4期）が描く内容と相応することになる。

松平家忠は一回の普請がおおよそ二か月程度を期間として参画している。また文禄二年（一五九三）二月十四日条に「普請番かハり候て」とあり、番役であったことが伺える。これらから、『家忠日記』に記載された普請は、江戸城普請のうちの松平家忠が参画した番役であり、江戸普請はこの全期間に普請番の交代体制により継続的に実施されていたと考えられる。普請場所も『落穂集追加』の（第1期）および（第2期）の場所が並行して実施されていたと考えることが妥当だろう。また普請番ごとに「出来」という記載がある。この記載から普請番作業の当初に目標が定められ、綿密な計画で実施されていたと考えられる。

『家忠日記』ではこの後に伏見の普請の記載が続き、江戸城の普請記事は見られなくなる。このことから、伏見普請により江戸普請は関ヶ原合戦に至るまで中断したと理解されてきた。しかし、江戸普請が普請番の編成による作業であり、綿密な計画をもっていたと考えるならば、伏

【表】『家忠日記』の江戸普請記事（増補続史料大成『家忠日記』臨川書店 1968）

年	月	記事
天正十九年	四月	小田原へ道具とりに越候、
		二日、丁酉、雨降、同与五左衛門江戸へ越候、高野聖越候て、おかい候、江戸の御普請、壱貫五人つゝ越候へ之由、普請奉行より申来、同十郎左衛門むす子死去候、大原朱里母もはて候、
		五日、庚子、江戸へ普請衆五人つかハし候、殿様御前にて我々たかつかい候て、当地麦ふミちらし候由候、阿部善八さゝへられ候て、申分ニ原田金左衛門こし候、公事にて候、
天正二十年・文禄元年	三月	廿九日、己丑、御普請、御隠居御城堀当候、
	四月	二日、壬辰御大方様より、普請場へ御たる、ほかい給候、
	五月	三日、壬戌、普請出来候、但奉行衆、天気あかり次第、普請場うけ取こし候への由申候、三浦右衛門八残し候て帰候、舟橋近辺にて新二郎、昨日二日ニはて候由申来候、舟橋ニ留候、
		五日、癸亥、江戸普請ニうすゐ迄こし候、うすゐ城へ出候、うすゐ隠居にて振舞候、
	七月	六日、甲子、江城普請、ちとのひて帰候、
		夜雨降 十日、戊辰、江戸普請ニ越候へ之由、申来候、夫丸出候、
		十一日、己巳、江戸普請ニ佐倉いつもの宿迄こし候、嵜二東、永楽三十疋出候、
		十二日、庚午、舟橋より舟にて江戸へ着候、我々屋敷ニ居候、
		十四日、壬申、普請はしめ候、つきとい十四間あたり候、
		十六日、甲戌、普請所、能候て、人数半分帰候、
	八月	八日、乙未、普請大方出来候間、人数少置候て帰候由、奉行衆より申来候、
		廿二日、己酉、「十兵へ助崎へ被帰候て、平右衛門、助崎迄越候」会下へ参候、江戸普請出来て、跡ニ残置候人数返し候、
	九月	己午之間 三日、庚申、大なへゆる、又三度ゆる、舟作候、
		四日、辛酉、江戸普請そんし候て、又人数つかハし候、

年	月	記事
文禄二年	正月	江戸夫丸出候、 廿三日、己卯、江戸より、普請早々越候へ由申来候間、明後日廿五日ニ可出候段ふれ候、去年春中、大納言様つくしへ御出陣之刻、たて候てつはう衆二人、中間二人帰候由候、
		廿六日、壬午、江戸普請ニ佐倉迄出候、去春筑紫へ遣候鉄炮衆上下四人、御返し候、そとくちにてあい候、さくら前の（宿）鶴岡ハ上方よりめんほくにて、賀藤申者所ニ留候、
	二月	五日、庚寅、普請場へ出候、村雨ふる、
		十四日、己亥、普請番かハり衆越候、平岩主計所より、嵜十束、鱈廿本にて音信候、
	三月	三日、己午、普請漸出来候てかへり候、佐倉□
		十八日、癸酉、江戸普請衆、かはり候てこし候、又江戸へ兵粮舟出し候、
		廿一日、丙子、雨降、東堂時儀にて被越候、江戸普請出来候て、人数帰候、
	五月	「江戸普請六月廿日ニ越候へ之由ふれ候、」
	六月	小雨 十八日、主米、江戸廿日之御普請場うけ取ニこし候、明かた地震、
		廿二日、乙巳、江戸普請場、請取候間、早々こし候へ之由申来候、
		廿三日、丙午、江戸御普請ニ佐倉迄出候、
		廿七日、庚戌、普請場へこし候、夕立、
	七月	三日、乙卯、普請場へ出候、本佐渡所よりあゆのすしこされ候、
		廿七日、己辰、普請出来候て、佐倉迄かへり候、
	八月	廿三日、乙巳、大雨ふる、江戸より、まへのふしんそんし候間、早々普請こし候への由、御普請奉行より申来候、
		廿五日、丁未、夜雨、江戸へ普請衆こし候、
文禄三年	正月	廿三日、壬寅、江戸御普請、来廿七日ニ被相延候由ニ申来候、板四郎右より、小見川知行かへ之儀、大方相済候、御意も其分之由申来候、

見普請に携わった松平家忠が『家忠日記』に記録を留めずとも、余人をもって江戸城の普請は継続していた可能性が残る。後述する状況は普請の継続を考えさせている。したがって、文禄三年以降の江戸普請は継続していたと考えておきたい。

また『家忠日記』は、江戸普請に先立つ天正十五～十七年（一五八七～八九）に実施された駿府城の普請にかかわる記事を載せている（三月三日条ほか）。この駿府普請において松平家忠は明確に石垣普請を行ったこと記している。他方、江戸では石垣普請の記載はない。この記載の相違を比較するならば、少なくとも文禄二年以前、江戸では石垣普請が実施されなかったことになる。なぜ駿府では石垣普請を行い、江戸では行わなかったのか。静岡市により近年に実施された駿府城発掘調査の成果とも関連し、今後に大きな課題を提起している。

今一つ注目すべきは次の史料である。

【史料2】『石川正西見聞集』

（埼玉県立図書館編『埼玉県史料集』第1集 一九六八）

一、関東御入国之比は江戸御城は御本丸之外ニツ御丸御座候つる、此内一ツは福松様(松平忠吉)御座候つる、又一ツにハ御万様(武田信吉)御座候つる、是を一ツに被成、今の御本丸に成申候、山の手は皆野原にて御座。〔候〕つる、西の御丸も野にて御座候つ新儀に被成立候、山の手の惣堀も其以後に被仰付、御ほらせ被成候、西の御丸も堀そこ(底)より石垣に被成可然と、皆々被御申上候へ共、将軍様御合点不被成、中ほとより石垣に被仰付候、かやうに略被成候儀も、諸人苦身御いたハりと、其比下々取沙汰申候つる、江戸中の御普請の事も、本田佐渡殿(本多正信)みな御さしつ次第にて候、本田佐渡殿、毎日明七ツ比に御普請へ御出候つるまゝ、諸大名衆不残ちゃうちん御たてさせ、丁場〳〵へ御出被成候、雨風雪中にも御けたい無之候、浄和様(松平康重)きさい(騎西)・かさま(笠間)に御座候内、御苦労被成候、我等共は御大名衆より尚以夜の内に普請場へ罷出、朝めしはひる比被下、夕めしは宿へ帰、火たて、毎日被下臥候ハんと存候へは、大雨の日はほり(堀)よりあけ(上)候つち(土)、ほりそこ(堀底)へなかれ(流)入候を。夜ふしんに しからミ(柵)をかき候て、せきとめ(堰き止め)、又はほり(堀)の水をつりへ(釣瓶)にて五重六重かへあげ申候、さなく候へは、あくる(明くる)日ほり(堀)ほる(掘)事、不被成候、惣侍衆も中間同前にくわ取、もつかうもち申候、辛労筆にも盡しかたく候、

とかく道三堀の開削記事として紹介される史料であるが、丁寧に見ると「道三堀」を示す具体的な記載はない。むしろ江戸城と城下の普請という視点で見直してみるべき史料であろう。

冒頭に「関東御入国之比」に時期を明示していることをまず押さえたい。そのうえで、最初に本丸拡張を書き記す。当初の構造は本丸および二つの郭があったとする。本丸にはおそらくは自身が入居し、残る二つの郭には松平忠吉と武田信吉の二人の子息がそれぞれに入居したと記す。その後、この三つの郭を仕切る堀が埋め立てられ、「今の御本丸」になったとする。『落穂集追加』ほか多くの史料が、後北条段階の堀を埋めて本丸を形成したとする記事、とりわけ「御入国の刻、御本丸・二の丸・三の丸と申て有之」⑯を載せていた。当該部分はこのことと照応し、松平忠吉と武田信吉が入居した郭は「二の丸・三の丸」だったことになる。

この松平忠吉と武田信吉の二人の子息が入居したと明示する点を特に注意したい。つまり天正十八年（一五九〇）の入国当初は、北条段階のままの江戸城が利用され、一定時間を経た後であっても、いまだ「関東御入国之比」と呼べる程度の時期に、本丸拡張工事が実施されたことになる。『家忠日記』の《一回目》の普請が天正十九年（一五九一）四月という時期にあたることは、まさにこの時間差を示していると考えてよいだろう。

続いて、西の丸の状況を記す。当初は野であったところを新たに普請したとする。文章からすると、「関東御入国之比」が対象とする内容は

これだけで、続く文章は「其以後」となるので、「関東御入国之比」ではない。年代不詳の「其以後」には「山の手の惣堀」が命じられる。「惣堀」は惣構の堀を意図していること、そして「山の手」と方角が示されていることから、桜田堀―半蔵堀―千鳥ヶ淵があたると考えられる。また西の丸の石垣を高石垣にしようとしたところ、将軍の許可が下りず、鉢巻石垣にしたと記している。『落穂集追加』と類似の記載であるが、「西の御丸も堀そこより石垣」とあるのは、桜田堀・半蔵堀ではなく、道灌堀などの西の丸を囲む堀そのものであろう。残念ながら「将軍」が家康であるか秀忠であるか不明であるが、少なくとも西の丸石垣化が慶長八年（一六〇三）以降であることは間違いない。内容は『落穂集追加』の（第5期―後期）に相当する。『石川正西見聞集』は「関東御入国之比」という認識を幅広く設定し、『落穂集追加』の（第5期―後期）までも含んで記載していた。両者は記載に時間的なずれを持ちながらも、中核部の普請は本丸と西の丸という二つの場所で普請が実施されたという認識で一致している。

そして、「江戸中の御普請の事」として、城下の堀普請を記載する。掘削・しがらみの構築・水の塞き止め・排水と、「辛労筆にも盡しかたく候」と記すように難工事であることがうかがえる。本多正純が現場で監督をしており、かつ松平康重が騎西そして笠間の時代とあることから、笠間から転じる年代が慶長八年（一六〇三）であるので（『寛政重修諸家譜』）、堀普請は以前の状況を示すことになる。おおよそ『落穂集追加』の（第3期）の記載に相応することになる。そこで、『落穂集追加』⑱の記載との関係から、道三堀の普請を示すと先学は理解したのであろう。しかし、先にも触れたように『石川正西見聞集』には道三堀の普請と限定する記載はなく、むしろ「江戸中の御普請の事」としてあることから、町場普請全体と考えることが妥当である。また（第3期）であり、天下普請ではなく、徳川家による普請の段階であることを踏まえれば、道三堀を含む大手前の郭を囲む堀とそれにかかわる日本橋川などの堀普請と考えられる。

『石川正西見聞集』の記載からも「落穂集追加」が描く時期の様相が窺い知れることになる。

三　「日比谷入江」と江戸城下

本丸拡張と新城築城

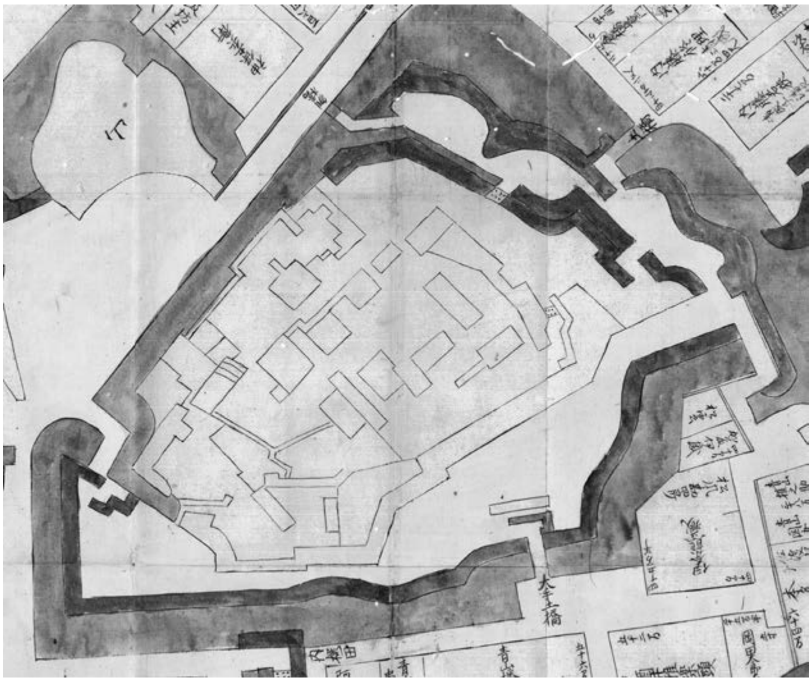
『落穂集追加』の記載を前提として江戸の時期区分を考えると、（第3期）徳川入封段階と（第4期）御新城普請段階が大きな意味を持つ。この二つの時期は、一五九〇年代の豊臣大名徳川家という時期に該当する。

そこでまず一五九〇年代における江戸城の構造についてまとめてみたい。基本的に本丸周辺の江戸城と西の丸周辺の新城という二つの城が並立する状況で、一体とした江戸城という構造ではなかった。その視点に立って、構造に注目して分析を加えたい。

この時期の江戸城中核部を考えさせる図として「慶長江戸図」がある（齋藤 二〇一九）。同図では本丸の南北には馬出が配置されていた。これは織豊期の平城タイプの城を中心に普及した構造で、聚楽第（京都市）に始まり、広島城（広島市）・高岡城（富山県高岡市）ほかで確認することができ、同時期の関東地方では小田城（茨城県つくば市）、さらに徳川領国では箕輪城（群馬県高崎市）に遺構が残る。江戸城も織豊期の城館構造に影響を受けていた。

ところで、馬出について『落穂集追加』には興味深い叙述がある。

㉚　其日晩方に至り、佐渡守殿（本多正純）御前（徳川家康）へ被出、今昼も申上候通り、此御丸の石垣の義は返す〳〵も私の不調法、恐れ入奉存候、右御石垣斗にても御座なく、当御城には御馬出と申儀、相見え不申候間、何方に於ても一ケ所被仰付候様にと在之儀をも、達て御すゝめ申上候に



【図３】「慶長江戸絵図」本丸周辺
（東北大学図書館狩野文庫・狩3-8827　部分）

付、左様も可被仰付かと有上意を以、其御指図等も出来申候間、追々は御聴に達し申にて可有御座かと存候を以申上候、私重々の不調法と恐入奉存旨被申上候へは、

秀忠期にあった西の丸西側の高石垣化計画中止にかかわる話題として記載されている。このなかでは本多正純が、「江戸城には馬出が一つもないので、普請すべき」と提案している。「どこであっても一ケ所は馬出を普請するように命じられていることもあるので」と、命令を踏まえたという。本多が家康を説得する根拠としたこと、そしてなによりも当時の聚楽第に系譜を引く近世城館の馬出のことであるから、命令を発した主体は豊臣政権に関わると考えるのは許されよう。そのような命令あるいは認識が存在したことは注目したい。

しかし、本多正純の発言とは異なり、家康期の江戸城本丸には南北に馬出が存在した（齋藤 二〇一九）。このうち南側の馬出は、慶長十年代の本丸南側の正面化への改築過程において、堀が埋め立てられ、新二の丸の一部となった。また北側の馬出もその後の本丸拡張のなかで埋め立てられた。いずれもが消滅してしまったのである。同時代を生きた本多正純がその経過を知らないとは思えないので、『落穂集追加』のこの部分の記事に創作性が疑われるとともに、この記載の成立年代が江戸城にかかわる他の記載と比べて、話題の成立年代が下ることを示唆している。『落穂集追加』の成立を考える上で、重要な記述である。

話題を本丸の馬出に戻すと、この存在を前提に「慶長江戸図」を見直すと年代はどうなるであろうか。少なくとも図の本丸周辺についての、完成年次は明らかにはならないが、『落穂集追加』の（第1期）、『家忠日記』では天正十九年（一五九一）四月頃に始まる普請によって完成したものと考えるべきとなる。

この年代観をもって本丸の正面と考えられる北側を、今一度、注視してみたい。まず、三連続である馬出のうち中央の馬出の門であるが、徳川期の高麗門と櫓門のセットという規格による枡形門とは異なる様式の虎口であったことが確認できる。本丸内側から中央の馬出へは平虎口で、おそらくは架橋による連絡がある。本丸内側から東側の馬出状の郭[10]への連絡は、現状の高低差から推測すると、おそらくU字型にゆるやかに下る坂道であろう。その坂道が馬出に至ると塁壁に沿って北方向へと折れる。すなわち一折れの門を通過し、東側馬出状の郭内に至る。ここから北の丸方面へは、馬出状の郭の西側に一折れの門が構えられる。他方、東側の二の丸方面へは現状の下梅林門の形状で虎口が構えられている。

この東側の馬出状の郭から下梅林門へのルート周辺が梅林坂にあたるので、家康以前に遡る道筋が存在した。すなわち、道筋の多少の移動があったとしても、太田道灌期にまで遡る古道の存在を前提として縄張りされて、（第１期）の改修工事は実施されたと考えてよいだろう[11]。

この本丸北側に対して南側では南端に平虎口が構えられ、その前面に三角形の馬出が据えられていた（齋藤 二〇一九）。これらの構造はまさに豊臣期の各地の城館と関係する構造であり、徳川家康による（第１期）の普請による構造であったと考えられる。

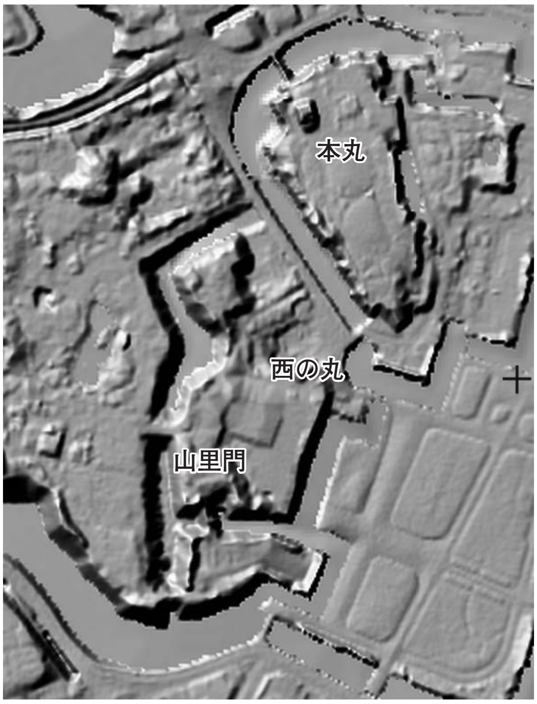
馬出の存在だけでなく、北側には折れをもった虎口を備えるなど、北側に向けては本丸の正面性は高いことが改めて確認できる。梅林坂を下る道筋は大手筋と考えるべきなのであろう。

本丸周辺について考察を重ねてきたが、ここで一五九〇年代の、本丸周辺に限定される江戸城の構造を概観してみたい。

本丸周辺は現状では本丸書院門・中の門が図示される以前の『慶長江戸図』に描写される構造を基本に考えたい（齋藤 二〇一九）。北側を正面とし、南北それぞれに馬出を配置する。北側は三連で南側は三角形の馬出が配されていた。馬出はともにいわゆる聚楽第タイプで普請される矩形とは異なっている。この点は領国内で井伊直政が普請した箕輪城と等しい。本丸の周囲にはこの南北の馬出とその両者をつなぐ帯郭が配置され、それらが全体として本丸をコの字状に囲む。南側の三角形馬出と帯郭は後に二の丸と呼称される郭に拡張されるが、この段階では個別の名称は確認できない。帯郭のさらに東側は、平川の流れに沿って二の丸（後に三の丸に改称）が配置される。この旧二の丸（新三の丸）には、この段階で平河門橋と大手門橋が架かり、虎口を形成していた。後の内桜田門（桔梗門）がこの段階で存在したかは明らかではない[12]、平川を挟んだ反対側の空間すなわち大手前は後述するように普請の段階にあった。また北の丸であるが、北の丸西側の千鳥ヶ淵が『石川正西見聞集』にある「山の手の惣堀」であると考えられ、一城化を示す堀であることから、この一五九〇年代においては北の丸は存在しなかったと考えられる。つまり、本丸を中心とする一五九〇年代の江戸城は本丸・新二の丸付近・旧二の丸（新三の丸）の三郭という構造であったと考えられる。

次に当該期の西の丸周辺の新城についても考察を加えたい。西の丸について地形図を見ると、山里門にはその前面に四分の一円（西側）と四角形（東側）の合体の構造が見える（【図４】参照）。西の丸の入口に山里門があったことは間違いないが、この門を前提とすると西の丸大手門・西の丸書院門（玄関門）を経る構造へと登城路に変更があったことが推測される。おそらくその変更時に、西の丸書院門の前面に空間を確保する目的で、四分の一円に四角形が付加されたと考えられる。つまり、西の丸の山里門を入口として、その前面に丸馬出があったと構造を読み込むことができる。

しかし、この丸馬出の存在は、江戸時代を通じて表現した絵図はない



【図４】西の丸周辺図
（国土地理院地図 陰影起伏図に加筆）

し、研究史の上でも存在が指摘されていない。つまり江戸時代のなかでは存在しなかった丸馬出である。ここを丸馬出と考える場合、伏見櫓が山里門を監視する位置にあたり、櫓を構える意味も理解できる。また道灌堀の外側に沿う道は大道という呼称があり、中世以来の幹線道路であったと考えられる（千代田区教育委員会 二〇〇一）。寛永段階でも尾張・紀伊・水戸徳川家が屋敷を連ねた道沿いであり、山里門外の丸馬出は西の丸の正面にあたったと考えられる。おそらくは一城化がなされ、西の丸も従来の西側から西の丸下への連絡など、江戸城全体的に東側が重視されるにともなって、西の丸大手門付近を矩形に郭を張り出させて的場曲輪の形状に整え、その空間を通過する、西の丸大手門から二重橋を経て西の丸へと至る登城路が新規に設定されたのであろう。

この点について、「慶長江戸図」には的場曲輪と新規の登城路が描写されているが、従前の丸馬出であった段階の様相を読み取ることができない。図の作者には従前の構造が理解されていなかったためと考えられる。加えて、本丸の描写に比して西の丸の様相はゆるやかな線のみであり、情報量が少ない。作者が西の丸についての情報をさほど持っていなかったことの反映であろう[13]。「慶長江戸図」にも反映していないならば、丸馬出はそれ以前に存在したものであり、まさに新城築城のなかで普請されたものと考えられる。つまり、西の丸周辺の新城を考えるにあたっては、この山里門と丸馬出が重要な視点となる。

他方の西の丸北側であるが、紅葉山が一城化で江戸城内となり、紅葉山の山王に参詣ができなくなったと状況が語られる（㉔）。しかし、「御新城の御取立以前は、紅葉山を諸人の慰所に仕候となり、」（⑳）との記述は、新城築城段階で紅葉山は城内となったと解することができる。『落穂集追加』の記述に曖昧さを覚えるが、紅葉山は新城内ではありつつも、一城化以前では庶民の参詣が可能であったということになろうか。いずれにせよ、西の丸と紅葉山の間には何らかの仕切りがあったと考えるべきであろう。江戸時代には徳川家霊廟が西の丸の際まで建立されている。おそらく霊廟が営まれる以前には、参詣人が出入りすることを考えると、両空間の境界には堀などの仕切りが存在し、区画していたのではなかろうか。ただしこの境界に設けられたであろう西の丸側の虎口の状況はつかめない。

やや曖昧さを残す状況であるはあるが、新城普請の段階で紅葉山までが城域ととらえられたのであろう。とすれば、紅葉山を取り囲む道灌堀は当初の形であったことになる。西の丸周辺で中核部を構成する堀は道灌堀であるので、通説が唱えるように『家忠日記』天正二〇（文禄元）年（一五九二）三月廿九日条の「御隠居御城堀」は道灌堀であると考えてよいだろう。

北の限界をこのように設定すると新城は西の丸を主郭、西側の山里丸を副郭とし、北側に紅葉山が連結する三郭の構造で、山里丸の南側には丸馬出が構えられていた。「慶長江戸図」はこの西の丸と山里丸の間に、線状に横堀を描写しており、興味深い。西の丸北側の虎口の状況が不明であるが、この丸馬出の存在から、山里門が新城の正面であったと考えられる。その場合、道灌堀沿いの道は新城とアクセスする重要な道となる。当時の幹線は丸馬出（後の的場曲輪）を通過して、台地上から低地部の西の丸下へと下る、桜田・日比谷の城下と繋がっていただろう。

当該期の江戸城と新城はこのように考えられる。ともに主郭に馬出を配置するという構造を基本としている点が重要である。豊臣期らしい構造の城館であったことが指摘できる。

大手前の整備

本丸を中心とする江戸城および西の丸を中心とする新城という二城が並立する段階に、大手前の整備も進んでいた。徳川家康入城以前には、平河および「大橋宿」という町場が存在した場所であるが、「慶長江戸図」

段階ではすでに武家地になっている。すなわち、天正十八年以後おおよそ十五年ほどで当該地の様相は一変したことになる。その際の大きなポイントは平川の流路変更・道三堀開鑿・常盤橋架橋が何時であったかであろう。

このことについては『落穂集追加』『正西見聞集』の記載は、少なくともこれらの普請を含んでいると考えたい。

この点に関連して、城下の銭瓶橋架橋の年代については次のような逸話がある。

【史料3】『慶長見聞集』（中丸和伯　一九六九）

（江戸の川橋にいわれ有る事）

町には舟町と四ケ市のあひにちいさき橋只一つ有、是は往ふくの橋也、文禄四年の夏の比、此橋もとにて銭かめを掘り出す、永楽・京銭打交りて有りしを四ケ市のもの共、此銭かめを町の両御代官板倉四郎右衛門（勝重）殿、彦坂小刑部（元正）殿へさゝけ申たり、それより此橋を銭かめ橋と名付たり、

当該の部分は、平川の流れに架かる五つの橋を紹介したうちの、銭瓶橋の来歴に触れた部分である。五橋とは平川の上流から雉子橋・一ッ橋・竹橋（おそらく神田橋を竹橋に誤認）・大橋（常盤橋）、そして町場の銭瓶橋の五橋である[14]。このように解すれば記載する内容は、おおよそ流路変更後の平川の流れと考えることができる。銭瓶橋の一方は舟町に接する。舟町は流路変更後の平川の末の部分であると引用の前段に記されている。銭瓶橋の比定地を通説の千代田区大手町二丁目とすると、舟町・四ケ市の比定地については検討の余地を残すが[15]、ここでは「文禄四年の夏の比」という年紀に注目しておきたい。

掘り出された銭瓶は江戸の代官である板倉勝重および彦坂元正に届けられた。この両名は天正十八（一五九〇）年の家康関東移封の際にともに江戸町奉行になった。後に板倉は慶長六年（一六〇一）に加藤正次・米津親勝とともに京都奉行となった。他方、彦坂は慶長六年六月鶴岡八幡宮修理造営の不備のため、勘気をうけ閉門。さらに同十一年正月、支配地農民による不正行為の訴えと年貢勘定の引負いのため改易になった（ともに『国史大辞典』）。つまり慶長六年以前のできごととなり、文禄四年の記載と整合性をみせる。大手前の整備の確定した年代は得られていないが、『落穂集追加』の（第3期）にあたるとみられ、おおよそ一五九〇年代のことであった。

この大手前の普請にともなう堀の開削工事は、その後の工事の前提となったと考えられる。すなわち、平川流路変更によって日比谷入江への流水が減じられ、道三開削によって日比谷入江からの排水が可能となり、日比谷入江埋め立ての条件が整ったことになる。これにより、江戸城下の工事が旧三ノ丸（西の丸下）普請へ進む契機となったはずである。『落穂集追加』では（第3期）から（第5期─後期）に移るという時間的変化になるが、先にも述べた通り、大手前の整備の年代は（第5期─後期）にまで下ることなく、（第3期）へと遡る。文禄四年（一五九五）という記載はより現実味を帯びている。

関ヶ原合戦前後の段階

『落穂集追加』は（第3期）と（第4期）に続く画期として関ヶ原合戦を想定していた。それに対して、鈴木らは征夷大将軍の任官すなわち江戸幕府の開府を画期とした。その設定には三年のズレが生じた。わずか三年という時間であるが、政治史に照らすと持つ意味は大きい。しかし、『落穂集追加』ではさほど慶長八年に画期性を求めていなかった。この点を意識しつつ、この段階を概観してみたい。

日比谷入江の埋め立てについて、重要な知見をもたらしたのは、和田倉遺跡の発掘調査である（千代田区教育委員会　一九九五）。この調査では江戸時代以前に和田倉門の地は海であることを明らかにするととも

に、埋め立てについても触れている。以下は層位別に概括するなかで、最下層の報告である

一期（16世紀末～17世紀初頭）

当該期に位置付けられる遺構は、15号遺構だけである。当該遺構は、標高０・６ｍから掘り込まれており、他の遺構とは遺構構築面が１ｍ以上低い位置となる。遺構確認面は、自然堆積層の直上に認められた砂利を多量に含む青灰色シルトの埋立て層となる。現在の当該地の水位面が１・２ｍ付近であり、発掘調査時においても、この遺構内にすぐに水が溜まる状態であった。そのため、本遺構は生活面に伴うものではなく、埋立ての過程において構築されたと想定するのが一番妥当である。この埋立てと15号遺構の構築時期は、自然堆積層直上という点や15号遺構出土遺物の年代観からいっても、最初の埋め立て工事である16世紀末～17世紀初頭の蓋然性が高い。

このように調査成果を整理する。

また、先にも触れた点であるが、鈴木が指摘する次の点も重要である（鈴木　一九八八）。

そしてアダムスにはのちに日本橋魚河岸になった一角に安針町の宅地を与え、ヤン・ヨーステンにはいまの和田倉門から日比谷にいたる濠端に、屋敷地を与えている。それは彼の名にちなんで八代洲河岸と呼ばれた。この八代洲河岸の場所が描かれている最古の地図（見とり図）は『別本慶長江戸図』（東京都公文書館所蔵）で、日比谷入江に面して、「舟の御役所」と書かれている場所があり、その図では八代洲河岸の記入はないが、後出の「寛永図」に隣接してヤン・ヨーステンを住まわせたことがわかる。城の対岸の江戸前島西岸に海軍司令部の「舟の御役所」があったことでもわかるように、日比谷入江は軍港的性格をもち、東岸は湊としての役割をはたしていたことを物語るものである。ヤン・ヨーステンと江戸との関わりの詳細は不明であるが、乗船するリーフデ号が豊後に漂着したのは慶長五年（一六〇〇）三月十六日である。すなわち八代河岸に屋敷を得たのは関ヶ原合戦の年より以後であり、『別本慶長江戸図』の記載内容の正否はともかくも、当時はまだ日比谷入江が存在したことは認められるだろう。

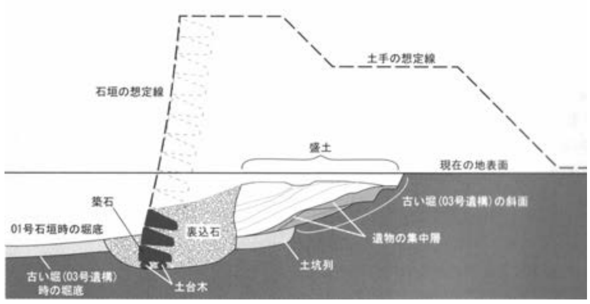
すなわち、日比谷入江の埋め立ては『落穂集追加』の（第４期）に開始されたが、その後、本格的な埋め立ては、『落穂集追加』㉕の記載が関連する、関ヶ原合戦以後に実施されたということになる。

そこで重要な視点となるのが、『落穂集追加』の（第５期―前期）の江戸城が一城化されるという時期にあたるという点である㉔。これ以前は二城が並列する段階であったが、一城化するためには、この二城を連結する普請が必要となる。一城化を示す一つの状況が、既に触れた江戸城西側の桜田堀―半蔵堀―千鳥ヶ淵の堀、『石川正西見聞集』が「山の手の惣堀」とする堀の普請である。桜田堀の普請はまさに『落穂集追加』の㉕であった。そして、今一つの考える普請が反対側の西の丸下の普請である。場所はまさに日比谷入江である。これらは日比谷入江の本格的な埋め立てが関ヶ原合戦後であり、一城化のなかで進行した事態であったことを語っている[16]。

関ヶ原合戦以後、本格的に進行した日比谷入江の埋め立ては江戸城下を拡大していくこととなる。従前に新城の城下として拡大していた日比谷町も一城化のなかで移転した㉖。具体的にはおそらくは西の丸下および大名小路の普請が原因したと思われる。その行先は明確ではないが、現在の港区東新橋に鎮座する日比谷神社、および中央区八丁堀に所在する日比谷稲荷は、町の移転にともなう結果なのであろう。

また『落穂集追加』ではこの時に大名小路周辺も造成されたと記していた㉕。この地は大名屋敷地として「慶長江戸図」にも描かれる地点である。おそらくは一城化の拡大の中で造成となったのであろう。この郭の外縁は呉服橋門・鍛冶橋門・数寄屋橋門そして日比谷門が固めて

いる。これらの門で固められた堀の様相は丸の内一丁目遺跡の発掘調査で確認された（千代田区丸の内一―40遺跡調査会　一九九八）。調査によって埋没していた寛永十三年（一六三六）普請の石垣の下半部が検出されたが、同時にその石垣に先行して土の壁面の堀が存在していたことが確認された。堀底には堀障子と思われる土盛りが並行して普請されていた。この石垣に先行する障子堀の遺構は、関ヶ原合戦以後の一城化と城下町の拡大によって掘られた遺構と考えられる。



【図５】　丸の内一丁目遺跡　遺構断面図
（千代田区丸の内1-40遺跡調査会 1998より）

ただし『落穂集追加』の「江戸町方普請之事」には「段々と竪堀・横堀が完成」⑱と記載する。この記載から一五九〇年代の大手前の郭を取り囲む堀の普請とともに計画され、普請が開始されていた可能性が考えられる。おそらくは一城化の段階においても引き続きの造成となっていたのであろう。

この段階をもって、江戸城は「慶長江戸図」に描かれた範囲の全域にわたって普請が施されたことになる。関ヶ原合戦が慶長五年に、「慶長江戸図」は早くて慶長十二年と考えられている。江戸城はこの間のおよそ七年間にわたる工事により、一城化と城下町の拡大を遂げ、「慶長江戸図」の景観へと至ったと考えられる。

おわりに

本論は「慶長江戸図」に描かれた景観がどのような経緯で成り立ったか、その点に切り込むことでもあった。その空間が所与の空間の変質ではなく、それぞれの時間においての機能を考えることで意義付けをした。天正十八年の本丸周辺の江戸城拡張および西の丸周辺の新城築城による二城並列の段階、そこから関ヶ原合戦後の一つの城へと変更、この二段階の変化に城下の構造も関連させた。その結果、関ヶ原合戦前後に大きな画期を求めることができると考えた。前半の豊臣期においては平川流路の変更と道三堀開削による大手前の普請、後半では日比谷入江の埋め立てによる西の丸下の普請が中核的な工事であった。

このようにして概観すると、都市構造に関しては慶長八年にさほどの画期性は求めることはできない。そもそもこの年は任官にともない、本丸の石垣化の準備が命じられた年として知られている。その石垣化は慶長十一年・十二年に実施された。まさに将軍権威の具現化として実施された。つまり、慶長八年の画期性は既述のような江戸城とその城下の拡張という都市計画とは異なった次元、すなわち権威の表現の目的で計画され、実施されたということができるであろう。そこで問題となるのは日本橋の架橋が慶長八年とされる点であるが、本論の及ばない点であり、課題を残している。

論述した年代的な課題の大半は、大枠としては至って通説的な見解に帰着する。しかし文禄から慶長年間前半の江戸の変貌は、著しく大きくかつ急速であった。このことをあらためて確認した。

【註】

1　この点は東京都江戸東京博物館が開館するにあたって設置された展示専門員会のなかで、「本来ではあれば家康と江戸の関わりである慶長期以前は、江戸東

京の歴史というコンセプトからは極めて重要なテーマである。しかし研究が十分でなく、展示する資料の問題もある。ゆえに寛永期の江戸から展示を始める」と決めたという。このことは当時の展示委員であった竹内誠江戸東京博物館名誉館長からの示教を得た。慶長期の江戸の解明という課題は江戸東京博物館にとって開館以来の重要懸案課題である。

2　江戸前島の位置づけに限らず、地下の各所から人骨や板碑が出土するが、この墓地を江戸の前提として理解している傾向がある。少なくとも、日比谷村・前島村・柴崎村・平河などの集落が存在した。確認される墓地について、江戸という広がりで理解するのではなく、むしろ個々の集落との関係で理解するべきではなかろうか。巨大都市江戸という呪縛から解き放って、中世の江戸とその周辺を見るべきと考える。

3　この理解は、水江漣子にも引き継がれる（水江　一九九二）。とりわけ水江は慶長八年（一六〇三）の画期性に注目している。

4　『落穂集追加』の書誌学的解説は『国史大辞典』が端的に、「大道寺友山（重祐）著。三十巻（写本で伝わるため巻数は不定）。徳川家康を中心に諸家のことにも及び、聞書を引証して年代的に記録した書。開巻天文十一年（一五四二）家康の誕生に始まり、第三十巻大坂落城、元和改元に終り、四百八十三ヵ条より成る。書名は、「孫や子のためともなれとひろひをく、しいなましりの落穂なれども」の自詠からでているようである。『落穂集追加』五巻（十巻本もある）は、友山が前書を刪削したもので、享保十三年（一七二八）ごろの著である。友山には、『霊巌夜話』『霊巌夜話大意之辨』『岩淵夜話』『岩淵夜話別集』などの著があって、『落穂集』とも、内容に関連があるので、写本として伝わっている間に混乱が生じている。」とまとめる。また江戸史料叢書『落穂集』（萩原達夫・水江漣子校注　一九六七）の解題においても、書名と関連する写本との混乱について指摘している。従前よりの課題である書名・写本・内容の相互関係などを整理することが求められようが、この点は筆者の能力を超える。なお、本論においては、江戸史料叢書『落穂集』（人物往来社　一九六七）を史料集として検討を行う。

5　『落穂集追加』の「西の御丸之事」において、小木曽太兵衛を次のように紹介する。

　我等若年の頃、小木曽太兵衛と申たる者有之候、此者の義は権現様浜松に御座被遊候刻、親以来御持筒同心にて、天正十八年小田原御陣の節も御供仕たる者にて、年寄ければ世倅を御奉公に出し、其身は隠居仕罷有て候を、我等養父子細有て目を懸候に付、手前へ呼寄せ養ひ置候ゆへ、我等幼年の節より件の小木曽物語仕候を、朝夕承りたる事にて候、本末々の御奉公を勤候者故、立上りたる義をは不存候共、時代からの怪き事共の知れ兼候義をは、浅野（長治）因幡守殿なども我等の養父へ御申付け、又は近習の者を以て直に尋ね給ふ義なとも度々有之候、

　したがって、『落穂集追加』の江戸城と城下にかかわる内容は小木曽太兵衛よりの聞き取りが深くかかわっている。

6　「関東御入国の節」などとあっても、その北条段階の描写を意図したものを含む。

7　この記載から日比谷町は日比谷入江の西岸に存在したと考えられる。

8　この考えに基づくと、慶長七年頃と考えられる「別本慶長江戸図」に桜田堀から平川へと至る堀が描かれることに違和感がないことになる。ただし、一城化の段階でありながら、西の丸を「下山」と表記すること、西の丸下の郭が存在しないことなど西の丸の記載に疑問がある。また堀については、平川の流路変更を描きつつも、呉服橋から数寄屋橋に至る堀の記載がないことが不審である（この点は、後者の位置に前者を図示していることから、地図の作者が両者の流路を誤認し、混乱した結果である可能性があろう）。現状では新旧の情報が混在していると考えておきたい。

9　新三の丸の東縁近くの発掘調査では、中世段階では日比谷入江であったが、出土遺物から「慶長後期～元和期に整備・活用され」と結論付けている（東京都埋蔵文化財センター　二〇一五）。この成果に拠れば、旧二の丸（新三の丸）は東へと拡張していたと考えられる。

10　厳密にいえば、馬出は四周を堀で囲まれている構造を呈する。当該の東側の郭は南東部の本丸側が壁面で堀を伴っていない。機能的には馬出と変わらない。本論では形状から東側の馬出状の郭と表現する。

11　東側の馬出状の郭から下梅林門に向かわず、大手下乗門に至る道筋も絵図には確認できる。この道はそのまま「大橋」（新三の丸大手門）に至ることを踏まえると、家康期以前の永禄期の設定にまで遡ると考えられる。

12　「別本慶長江戸図」には当該の位置に門が設定され、吉祥門の名称が付けられている。

13　また、「慶長江戸図」には後の西の丸坂下門の位置に奇怪な形状の郭が描かれる。機能的には四周を堀で囲む小区画であるので馬出と考えられる。本丸下の蓮池

門（当時は三角形の馬出）から出た道と西の丸から下った道が合流し、西の丸下へと続くため、要所となる。道筋から考えて馬出があった可能性が高いが、あまりにも形状が不審であり、実在の可否については今後の課題としておきたい。

14　平川の流路であるので、大橋を大手門橋と解し、旧流路と考える可能性もある。しかし、この場合、雉子橋・一ツ橋が変更後の流路に架かる橋であり、かつ旧流路であるとすれば平川門橋の記載がないことが問題となる。よって変更された流路と考えられる。

15　現比定地は、道三堀架橋と考えており、厳密にいえば、平川に架橋された橋ではない。『慶長見聞集』は舟町を平川河口としており、常盤橋より下流と考えると、あるいは舟町は中央区日本橋小舟町に比定されるのであろうか。その場合、銭瓶橋は移転したと考えることになる。今後の課題とする。

16　谷口榮は「別本慶長江戸図」について、千鳥ケ淵～半蔵濠～桜田濠に至る堀と近世江戸城の東側の牛ヶ渕～清水壕～雉子橋～一ツ橋～神田橋～常盤橋～鍛冶橋に至る外堀が描かれている点に着目し、「別本慶長江戸図」への疑念を呈しつつ、「東側外堀については平川下流の付け替え問題に起因し、江戸前島と日比谷入江の問題に関わってくる」と指摘している（谷口榮　二〇一七）。東側の描写に日比谷入江があり、平川流路の変更との兼ねあいを考え、拙論と視点を共有する。しかし、「千鳥ケ淵～半蔵濠～桜田濠」を論点として「別本慶長江戸図」の正確性を否定することはできない。このことは既に論じた通りである。ここでの論点は絵図の成立年代を慶長七年と考えて「千鳥ケ淵～半蔵濠～桜田濠」という「惣堀」が普請されていたことを示すと考えるか、あるいは年代を慶長七年とすることを疑問とするかになろうか。この点も「別本慶長江戸図」の史料批判の一視点ということになる。

【参考文献】

相田文三　二〇一一「徳川家康の居所と行動（天正10年6月以降）」
　藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』思文閣出版
市村高男　二〇一三「惣無事」と豊臣秀吉の宇都宮仕置—関東における戦国の終焉—」『北関東の戦国時代』高志書院
伊藤宏之　二〇一四「千代田区の板碑」「千代田区文化財年報」
江戸城跡北の丸公園地区遺跡調査会　一九九九『江戸城跡北の丸公園地区遺跡』
「角川日本地名大辞典」編纂委員会　一九七八　角川日本地名大辞典13『東京都』
菊池山哉　一九九二「五百年前の東京」批評社
　初出「東京史談」第二十四巻三・四号　一九五六
古泉弘　一九八九「中世江戸の景観—復元への模索—」「文化財の保護」二一
後藤宏樹　二〇〇四「江戸の原型と都市開発　作り替えられる水域環境」
　「国立歴史民俗博物館研究報告」118
小山貴子　二〇一五「江戸前島の中世的景観について」武蔵文化財研究所
　『東京都千代田区　有楽町一丁目遺跡』
小山貴子　二〇一七「中世豊島郡の宗教構造に関する基礎考察—郡北部地域を中心に—」「生活と文化」二六
齋藤慎一　二〇一九「慶長期の江戸城～「慶長江戸図」・「江戸始図」の再検討～」
　「東京都江戸東京博物館紀要」第九号
齋藤慎一　二〇二〇「『高橋』と『大橋』～中世から近世初頭における江戸城下の景観～」「東京都江戸東京博物館紀要」第十号
鈴木尚　一九六三『日本人の骨』岩波書店
鈴木理生　一九七五『江戸と江戸城—家康入城まで』新人物往来社
鈴木理生　一九七六『江戸と城下町—天正から明暦まで』新人物往来社
鈴木理生　一九七八　放送ライブラリー16『江戸の川・東京の川』
　日本放送出版協会
鈴木理生　一九八八『江戸の都市計画』三省堂
鈴木理生　二〇〇〇　ちくま学芸文庫『江戸はこうして造られた』筑摩書房
　原題『幻の江戸百年』筑摩書房　一九九一
谷口榮　二〇一七・二〇一八
　歴史舞台地図追跡「家康以前の江戸前島と日比谷入江」其の十八～二一「地図中心」
　543～546
谷口榮　二〇一八『東京下町の開発と景観』雄山閣
玉井哲雄　一九八六「江戸—失われた都市空間を読む」平凡社
千代田区　一九九八『新修千代田区史』通史編
千代田区教育委員会　一九九五「江戸城　和田倉遺跡」
千代田区教育委員会　二〇〇一『江戸城の考古学』
千代田区教育委員会　二〇一一『江戸城の考古学Ⅱ』

千代田区九段南一丁目遺跡調査会　二〇〇五　『九段南一丁目遺跡』
千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会ほか　二〇〇三
『東京駅八重洲北口遺跡』第一分冊および第二分冊
千代田区一ッ橋二丁目遺跡調査会ほか　一九九八　『一ッ橋二丁目遺跡』
千代田区丸の内1―40遺跡調査会　一九九八　『丸の内一丁目遺跡』
東京都埋蔵文化財センター　二〇〇九
『千代田区 江戸城跡―北の丸公園地区の調査―』
東京都埋蔵文化財センター　二〇一五　『千代田区 江戸城跡 三の丸地区』
中丸和伯　一九六九　江戸史料叢書『慶長見聞集』人物往来社
萩原達夫・水江漣子校注　一九六七　江戸史料叢書『落穂集』人物往来社
平凡社地方資料センター　二〇〇二　日本歴史地名体系第一三巻『東京都の地名』
平凡社
前島康彦　一九七五「太田道灌」関東武士研究叢書3『太田氏の研究』名著出版
初出「太田道灌」太田道灌公事蹟顕彰会　一九五六
水江漣子　一九九二　『家康入国』角川書店
武蔵文化財研究所　二〇一五　『東京都千代田区　有楽町一丁目遺跡』